資料４

文化財修理センター（仮称）の在り方に関する検討会（第３回）
R4.8.31

用具・原材料の入手の課題

―表具用手漉和紙（宇陀紙）について―

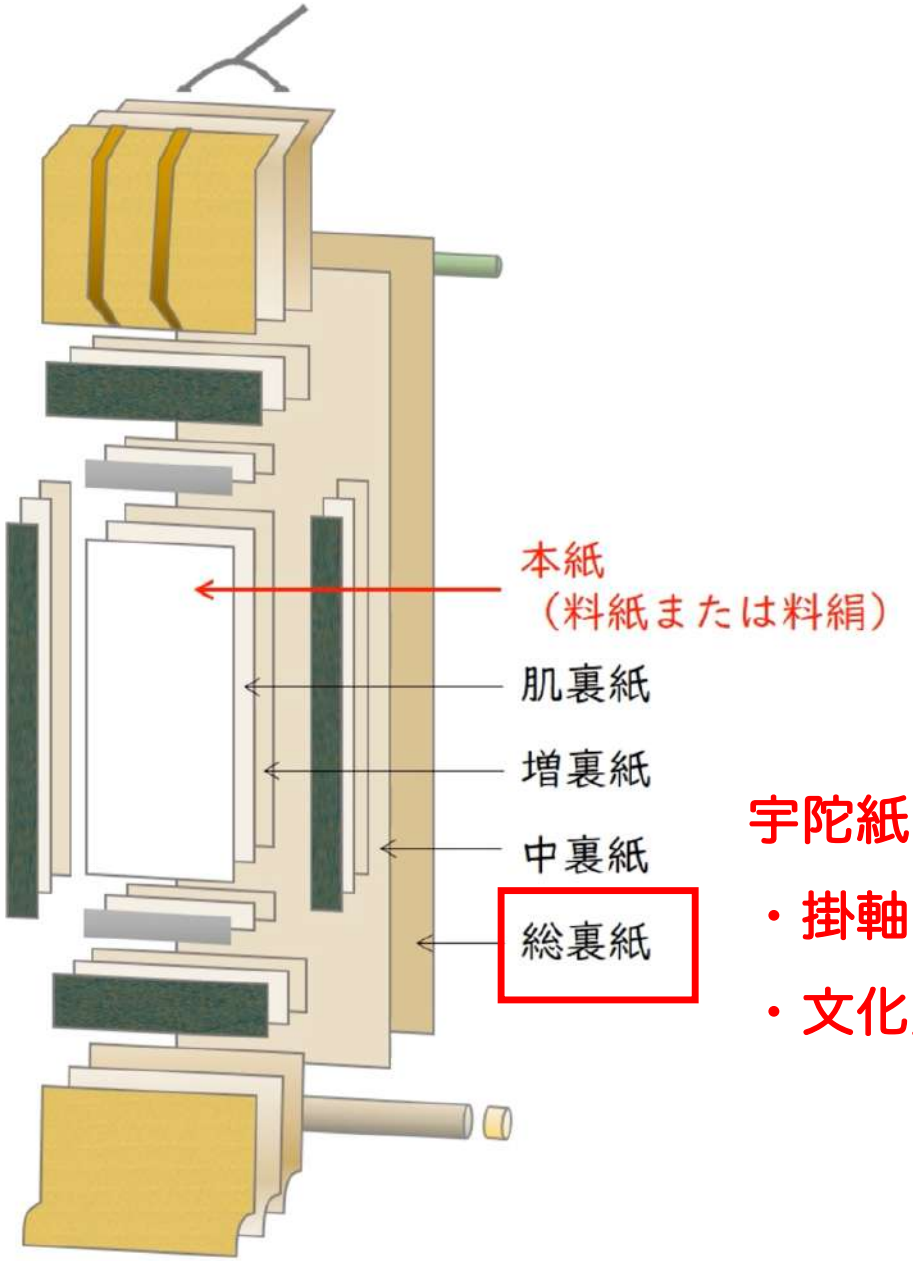
福西正行

表具用手漉和紙(宇陀紙)製作　選定保存技術保持者

宇陀紙（奈良県吉野町）

豊岡
舞鶴
敦賀
京都府
滋賀県
京都
大津
草津
甲賀
西宮
神戸
尼崎
大阪
明石
JR神戸線
E26
東大阪
奈良
伊賀
伊賀線
大和路線
名張
25
堺
大阪湾
岩橋山
橿原
大阪府
関西空港線
泉佐野市
泉南市
24
奈良県
東吉野村
吉野町
26
五條市
橋本市
川上村

宇陀紙の役割



宇陀紙

- 掛軸を一番外側で支える：安定性
- 文化財に接する　　：すれにくい

コウゾ

クワ科の落葉低木

切り揃えて蒸す

↓

黒皮、甘皮を剥ぎ、

内側の白色の部分のみにする（白楮）

↓

吉野川で洗い、天日干しにする

ちり切り（傷みなどを除く）

↓

煮熟　　（木灰の灰汁で煮る）

↓

叩解　　（叩いて繊維をほぐす）

・良質なコウゾが不可欠

・茨城、高知、富山などから入手

・地元での栽培の模索

・コウゾ栽培の難しさ、大変さ

良質なコウゾの確保が大きな課題

白土（石灰岩）を混ぜる

ノリウツギの樹皮から粘液をとりだす

ネリ：漉き舟のなかの水にコウゾの繊維を分散させる役割

ノリウツギ

アジサイ科の落葉低木

宇陀紙は白土（石灰岩）を混ぜるため
化学反応によって凝縮のしない
ノリウツギが必要とされる

ノリウツギの調達の危機

・かつては紙漉が副業であった
（近場での採取で十分にまかなえた）
・紙漉が専業化→大量のノリウツギが必要に
・昭和に北海道産のものが用いられる

・平成６年、採取者の高齢化で調達困難
・直接の交渉で初山別村の事業者により採取
・動物被害で採取が不可能に
・平成２９年、交渉により浜頓別町の事業者により採取
・負担が大きく、採取辞退の申し出

●文化庁や東京文化財研究所と一緒に働きかけたからこそ、再開につながった
●一方で不安定であることは変わらず、調達の不安が繰り返されてきた

ノリウツギ　なぜ調達危機が起きるのか

短い採取期間	採取時期は７月から８月 専業にはならない仕事量 （季節労働は担い手の確保が難しい）
採取が自然からの収奪型	資源の枯渇が生じやすい。 獣害による急速な資源量の低下のリスクも 栽培の歴史が無い
小さな市場規模	必要量は約 500kg/年　収入源として魅力が低い ※平成６年には２ｔ以上必要であったとされる

文化財修理では必須であっても、個人や民間企業の経済活動では採算にあわない

北海道標津町が危機的状況を知り、令和４年度から計画的な採取を開始

・産業だけでなく、文化財保護への貢献、観光、教育などさまざまな観点

・文化庁の補助や、研究者、道総研林業試験場、東京文化財研究所の協力が大きな役割

標 津 町 （しべつちょう）

これまでの取り組み

調 査　**文化庁による用具・原材料の調査**

・用具原材料生産者、文化財修理技術者、東京文化財研究所と実施

→課題・危機感の共有

・現状の把握（かつての採取者、現在の採取者、採取者候補者などと対話）

支 援　**用具原材料の調達安定化にむけた文化庁の補助事業**

（美術工芸品保存修理用具・原材料管理等業務支援事業）

・「美術工芸品の保存修理に必要な高品質の用具・原材料を確保し継続的に供給するために必要な管理等に要する経費」に対する補助

→標津町でのノリウツギ採取が実現、吉野町でコウゾ栽培を本格化

研 究　**東京文化財研究所による原材料の保存方法の研究**

・保存方法が確立すれば、調達不安の緩和につながる

連携と継続があってこそ安定化が実現

宇陀紙製作技術の継承にむけて

心配していること

●需給量　安定しない（注文量が減少）

●技術継承　生業化が難しく、後継者は１名が限界

後継者が育つには数十年かかる

●用具原材料の確保　コウゾ・ノリウツギのほか

簀桁（すげた）や干板など

現状について期待を感じていること

●行政、修理技術者、研究者などとの連携が深まっている

←関係者との信頼関係や連携はとても重要

●国内外での関心の高さ　知りたい方は多いのでは？

←情報の集約・蓄積や情報発信は個人では難しい